白百合の姫たる君へ

夢見草

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

革命とは力のゲームだ

それは闇の中にて行われ、流れる血によって彩られる。

続べよ、想い。重ねよ、闘志

＊＊＊

世界的ステルスゲームの金字塔の一つ、アサシンクリードシリーズ最新作発売記念に

アサシンクリード×Ｆａｔｅシリーズのクロスオーバーものです。フランス革命を題材とした大作アサシンクリードユニティを基に、以前私が漠然と考えていたモノを書

きなぐりました。突貫クオリティなので以下の注意を含みます

・時代考証がめちゃくちゃです。更に言えば型月設定もむちゃくちゃです。兎に角ご都合主義がひどい

・私の技量不足によりキャラ崩壊しています。

・オリジナル成分が非常に多いです

それでもよろしい方は、どうか楽しんでいただけたら幸いです。

目次

The story｜tale that never spoken｜lost Fate／：That how story begins ―― 25

The story—tale that never spoken

闇に生き、光に奉仕する者。そは我らなり
――ニッコロ・ディ・ベルナルド・ディ・マキャベリ
＊＊＊
Laa shay'a waqi、un Mutlaq bale kouloun mumkin.
彼らの声が、頭に響く。
〝汝の刃を罪なき者から遠ざけるべし〟
〝ありふれた風景に溶け込め〟
〝教団の名誉を汚すことなかれ〟
彼らにとって何よりも大事な三つの信条が。
彼らはあらゆる時代、あらゆる文化に潜んでいた。弱者への多大なる献身者として。
そして人類の〝自由意志〟を守護せんがための砦として。彼らは気が遠くなるほどの遥か昔から、人類のための闘争を全うしてきた。全ては、その信条の指し示すままに。

彼らに刻まれたその教訓は、どんな敵をも打ち滅ぼし、幾多の救済を行ってきた。

――真実などなく、許されぬことなどない

そうして、まどろみの奥、その奥底に揺蕩うナニカの記憶に、俺は意識を埋没させた

＊＊＊

今やパリに正義などはなく、有るのは純然たるカオスだけ。革命以前の秩序は失われ、嘗て善であったものは今や打ち倒すべき悪となった。王制の衰退、周辺諸国との均衡の崩壊、新勢力の台頭。そう、”革命”だ。今迄虐げられてきたものたち、抑圧されてきたものたちが目を覚まし、新たな時代を作らんとする大きなうねりたる”波”となりて全てを飲み込んで行かんとする。

始まりは大砲の音と共に。人々はフォークを、包丁を、鋤を、鍬を、或いは剣を手に持ち、新たなる新世界の引き金を引く。道という道では血が流れ、まるでゴミクズのように誰かの命が失われる。

誰かはそれを”病気”だと称したか。この闘争の果に待つ”自由”という理想を追い求め、ただがむしゃらに進みゆくその様を。そのための犠牲は勘定に入れる事なく、またそれを嘆くこともない。本来確固たる理性を保って日々を生きている人間と、ただ生存本能のみに従って行動する獣と、一体いかほどの差があろうか。確かに、今のフラ

ンスは病んでいる。いずれ国家が衰退し、破滅を迎える一歩手前まで、この病が治ることは無いのかもしれない。

＊＊＊

「アナタ、お名前はなんというのかしら?」

「レオポルド・ル・シブレ。気軽にレオとお呼びください」

「まぁ、レオと言うのね。なんて素敵な名前でしょう!・ええ、ええ!確かに獅子のような人だわ!!」

その光景を、今でも覚えている。始まりはなんて事のない些細なきっかけで。それがまさか、こんな運命を描く事になりようとは、その時は思いもしなかった。

「ありがとうございます、姫様。身に余る光栄です」

「あら、姫様なんてそんなに畏まらないで。マリーと気軽に呼んでくれて良いのよ?」

「いえ、しかし姫様」

「マリー」

「え?」

「だって悲しいもの。姫様なんて余りにも他人行儀で無機質すぎるわ。これから貴方は私に仕える事になるのでしょう?」

「しかし……」

「それに、私達はまだ子供なのよ？なら、お友達になりませんでして？……ダメかしら？」

不思議な人だった。高貴な身分の生まれ。そうであれと天から祝福されて生を受けた人。ただの下級騎士出身でしかなかった自分と、あろうことか友達になろうなんて口にする人。

どんな賞賛の言葉でさえ、彼女の美しさを表現することは叶わない。この世に存在するどんな財宝だって、彼女の前ではその輝きが霞んでしまう。

そんな人が、気づけば俺の手を握って、少しだけ高い俺を上目に見つめながら、その瞳を輝かせていた。そして、その向かられた輝きに、俺は抗えなかったんだ。

「……分かりました、マリー。これから、よろしくね」

「ええ!!此方こそ、レオ!!」

それが、俺たちの始まりの記憶。大きな大きな父の手に引かれて紹介された、新たなご主人様。純真で奔放で、けれども気高く、そして高貴であった彼女との。

「ねぇレオ。貴方踊りは得意？」

「踊り、ですか？」

「もう、また口調が戻ってるわ」

「ああごめん。ついついクセでさ。それで、踊りだったっけ？」

「そう」
「出来なくはないと思う。でもマリーとは踊れないよ。釣り合わない」
「あら、そんな事ないわ。貴方はとっても素敵よ?それに、踊りは釣り合う釣り合わないなんかじゃないわ。楽しい時を、一緒に共有できるかなの」
「つまり?」
「一緒に踊りましょう?」
「分かった。エスコートしますよ」
「ええ、宜しくね」
彼女はお姫様として。俺は彼女に仕えながら護衛となる騎士として。お互いの道は随分と違っていたが、そんな環境だったからだろうか。一緒にいる時間は、あり得ない程に溢れていた。
大方は、俺がマリーに翻弄されることが多かったけど、それもどこか楽しくて、毎日の一瞬、1秒の時間すら愛おしかった。その関係をどうかと、首を傾げる大人達は多くいたが、何故か彼女の母であるマリア様は、そんな自分達の関係を良いものだと笑っていた。
夫であるフランツ様を誰よりも愛し、支えながら、当時あの宮殿の誰よりも強く、そして鮮烈に生きていた。一言で言ってしまえば、心地いいくらいの女傑だった。そして

そんな彼女のマリーもまた、才能に溢れ、才能に愛された姫だった。開かれる舞踏会ではとてもその年齢とは思わせない優雅さをもって、授けられる悉くの英才教育は担当者を唸らせる程に聡明に。枯れゆく花に心を痛め、何よりも弱き者に光を与える。そんな彼女の少女期は、暖かさと優しさに満ち溢れていた。

「素晴らしいわ。なんて素敵な演奏でしょう。そうは思わない？レオ」

「うん。けどさ、悪魔を賛美する曲ってのはどうなんだ？アマデウス」

「細かい事を気にしちゃあいけないさ。生憎と、これは僕の性みたいな者だからね」

「はぁ、これだから天才は」

「おっと。同じく天才であるレオにそう言われるとなんだか複雑な気分だね」

「む……」

「あら、仲がよろしい事。私、少し妬けちゃうわ」

「何に？」

「全く君って奴は」

「……　お前にだけは言われたくないぞ」

様々な出会いがあり、多くの人達と関わってきた。姫様であるマリーは、そういった機会に大変恵まれていた。

その中でもやはり、アマデウスとの出会いは大切だろう。音楽の神に愛された天才で

あり、音楽に関してはどこまでも真摯で聖人なのに、なんでか人間としてはクズな分類。生まれた時からそう宿命づけられていた俺やマリーと違い、心の赴くままに音楽を生み出し続けて、その実たった一人だけに捧げた人。あの出会いが無ければそれこそ、今とはまた随分と違う人生だったのかもしれない。そして、決して忘れる事のできない、運命(Fate)のあの夜。

「私、今度フランスに行く事になったわ」

「聞いたよ。フランス王制の太子。ルイ＝オーギュスト様の元に嫁ぐんだろう？」

「ええ。レオは勿論だけど、貴方も知っていたのね。アマデウス」

「ボクも風の便りを耳にしただけだ。側近のレオほど、詳しくは知らないよ」

「貴方達はどう思う？」

「私はーーいや、俺は反対だ。今フランスは平和で、強大な国ではあるが、その栄光がいつまで続くかは分からない。ちょっとしたきっかけさえあれば、あっという間に崩壊してしまうような危うさがある」

「僕もレオと同じ意見だな。けど、これは僕達が決めていい事じゃない。マリアはハプスブルク家のお姫様だ。これは、ある意味必然でもある。けれどね、一番大事なのはマリア、君の心だよ」

星がキラキラと輝くある日の夜の事だった。かねてより噂されていた、マリーの嫁ぎ

先。高貴な身分に生きる人間が、決して逃れる事のできないもの。たまたま都合があった俺とアマデウスの二人が集まった先には、いつもの彼女とはまた少し違う、真剣な、何かを決意したような顔の彼女がいた。

「私はね、貴方達が大好きよ。私を護ってくれるレオも、私を愛してくれたアマデウスも。でも、それと同じくらい、私は皆のことが好きだわ。彼らが居なければ、今の私は存在していない。だってそうでしょう？民なくして王妃は王妃と呼ばれないのだから。なら、私はそんな大切な人々を守れるようになりたいの」

クリスタルパールの艶やかな髪を揺らしながら、サファイアブルーの瞳を強く輝かせそう口にする彼女の横顔は遠く、どこか彼方を見つめていた。それは誰よりも気高く、何人たりとも彼女の輝きを損なわせることはできない。

皆を愛し、民を守るために王妃になると決意した白百合の人。最も美しき慈愛の女性。であるなら、俺たちが口にすることなんて最初から決まっていたようなものだ。

だってそれが彼女の夢ーー理想なのだから。使える騎士として、何よりも友達として、その華奢な背中を支え押してあげるだけだ。

「うん、それが一番君らしいよ。僕は一緒に行けないけど、僕は僕なりに、君を見守っている。だから頼んだぜ？レオ」

「ああ、約束する。絶対に、マリーは俺が護ってみせる。どんな陰謀、どんな刺客から

だって。マリーがその夢を本物にして、実現させた後も、必ず護ってみせる」
「ありがとう……　アマデウス、レオ。私、貴方達と友達でいて本当に良かった」
「おっと泣いちゃぁいけないよマリア。その涙は、彼の地で待っているルイ皇太子の為にとっておかないと」
「もう、変わらないのね。アマデウスは」
「勿論だとも。マリアは、僕の初恋の人だからね」
　それはどこか微笑ましく、けれども少しだけの寂しさを伴ったハグだった。その光景を傍で静かに見届けながら、俺は必ず彼女の理想を実現させてみせると、再び強く誓ったんだ。
「なあデオン。お前本当はどっちなんだ？」
「さぁ？私がどちらなのか。君の想像に任せるとするよ」
「その変身、かの黄金の国にて人を化かすとかいう”キツネ”とかいうものにそっくりだな」
「レオだって、それこそ私にひけをとらない程の変装術を持っているじゃないか。それこそ彼の国の”タヌキ”とかいう存在そのものなんじゃないかい？」
「あら御機嫌ようお二人とも。一体何の話をしていらっしゃるのかしら？」
「いえ、何でも有りませんよ。王妃様」

そうして、マリーはルイ皇太子と結婚して王妃となり、俺は彼女お抱えの騎士としてフランスへと移住した。フランスの象徴、民の偶像たる王妃マリー・アントワネットを様々な邪悪、卑下た手から守る盾にして刃となりて。彼女と、彼女の愛する夫。そして国民を守る為にあり続けた。

――その傍で、人類に仇なす巨悪たる存在――遥か以前より在り続けるテンプル騎士を抹消する者――人が生説的に宿る自由意思を守護し、力なき声の代弁・代行者たる役割を担う者――アサシンとして

＊＊＊

フランス、パリ　１７９３年１０月１６日

パリ８区　革命広場付近

目標：

処刑場に乱入し、王妃マリーアントワネットの身柄を確保せよ

サブ目標：

・目的地まで敵に発見されない

・処刑執行人シャルル＝アンリ・サンソンの無力化

全市民の怒声と熱気が異様なまでの雰囲気を醸し出すフランスはパリの街中。宮殿から続く荘厳で格式のあるこの美しい街は今や、どこを見ても人に溢れていた。

ーー第三身分。当時のパリにおいてその大多数を占めていた人々達。身に纏う服はボロボロで、中には最早服という体裁を保っていない、ボロ雑巾とすら呼べるであろう格好をしていて、そのどれもが埃と煤に汚れ、くすんでいる。彼等に統一性はまるで無く、ただ共通しているのは、先を見据えるその両眼が何か強いもので満たされていることだった。嘗て第一、第二身分の存在にその全てを虐げられてきたもの達。そんな彼等は今、革命という名の自由を求める闘争の主役として全パリの市街中に溢れているのだ。

そんな中で、一人彼らとは趣の違う人物がいた。仕立ての良さを感じさせる濡羽色の、頭から膝下までをゆったり覆うどこかローブにも似た服を見に纏い、その素顔を目深にかぶったフードで覆い隠された人物。腰には鞣した革であつらえられたのであろうベルトにどこかこの当時最もポピュラーであったサーベルに似たーー僅かに刀身が曲線を描き、その刃に波のように走る波紋が美しい、かの極東にてカタナと呼ばれたーー剣が収められており、更に背中側の腰部分に備え付けられたホルスターには合計八つの銃身を筒のように一つにまとめた銃がどんよりとした曇り空から微かに溢れる光を鈍く反射させている。しかし、何よりも特筆すべきなのは、素顔を隠す為に覆われ

たフードだ。その先端は少し尖ってお
り丁度眉間ギリギリの所までを綺麗に隠す。その姿は、正に大空をその翼にて舞う優雅にして獰猛なハンター、鷹を想起させた。
そんな彼はその存在を周りの市民に一体化させながら一人、ポツンと立ち尽くすまま手に握る懐中時計を見つめていた。
カチカチ、カチカチ
機械式時計独特の駆動音を奏でながら、震えるように秒を進める秒針が丁度一周し、最高到達点たる１２の数字に重なった時それにつられて動く分針と共に、彼は時計を自分の懐に仕舞い込むと、ゆらりと幽鬼のように走り出した。
行き交う人々で溢れ返すパリの通りをまるで苦もなくスルリスルリといなしながら綺麗なフォームで走り行くその男は、時に進行上邪魔になる人を少々強引に押しのけ、また時にはその存在を取り囲む周りの市民に紛れさせて慎重に進みながら、グングンと目的地に近づいて行く。裏路地から裏路地へサブストリートからサブストリートを抜けて大通りたるメインストリートーシャンゼリゼ通りを抜けようと飛び込んだその時、彼が目にしたのは団子のようになって押し寄せる市民の波と、それを押しとどめようと徒党を組んで銃を突きつける、青と白そして赤を交えたフランスを象徴するトリコロールカラーの兵服に身を包んだスイス衛兵という光景だった。

彼等はどうにかして市民を抑え込もうとするが、最早暴徒にも近い彼等を押し留めることなど叶うはずもなく、やがて誰かが、手にする銃の引き金を引き、強引に踏み入り始めた。これでは、市民に紛れることもできない。暴徒とかしたその間をすり抜けるように通れば、流れ弾に当たらないとも限らない。そこで彼は、流れる人々を押しのけて通りを囲む建物へと向かう。

建物にある窓枠や備え付けられてベランダなどの突起物を足掛かりとし、彼はまるで苦もなくスルリスルリと建物を登ってゆくとあっという間に屋根の上へと上り詰めた。

「さてと」

辺りをちらりと一瞥し、脳内に叩き込まれたパリ市街の全貌を思い浮かべながら、次己がどちらの方角へと進むべきかを思考する。その長さ、大凡1秒。一息をつく暇もない刹那の時で判断を下した彼は、再び屋根の上を疾走する。高さ大凡五メートル程もある壁を蜘蛛のように登り、地面を蹴り穿って幅大凡十メートルの建物と建物を優に飛び越え、ありとあらゆる障害物を苦もなく踏破して行く。その姿は同じ人の身でありながら次元が違う。事実、彼にとってはこんなの平坦な道を駆けているのとなんら変わりはない。その絶技の名をフリーランニング、あるいはパルクールと呼ぶ。現代ではエクストリームスポーツの一種にも数えられる技で、かつ古くから伝わる教団の業だ。

そうして恐るべき速さを持って目的地付近の建物屋根上へと到達した彼は、あれだけ

激しく動いたにもかかわらず全く息を乱さないまま眼前に広がる光景を俯瞰した。
革命広場。パリの中心部、チェイルリー公園とシャンゼリゼ通り通りに挟まれば場所に位置するこの広場は嘗てアンジュ＝ジャック・ガブリエルによって設計され、ルイ十五世の騎馬像が設置されていた為に”ルイ十五世広場”とも呼ばれていた、フランスの名誉と栄光輝く象徴たる場所であったが、今やその面影はどこにもない。
威厳に満ち溢れた雄姿を晒すルイ十五世の騎馬像は今やなく、変わりにそびえ立つのは木と重厚な鉄とか織りなす死の象徴”断頭台”だ。罪深きものに慈悲を、苦しむ事なく即殺させるこの悪魔の器具は、今日最早珍しいものではなく、ほぼ毎日何処かしらで誰か第一、第二身分を含む罪人の首を刎ね落としている。
広場は、騒然としていた。何処もかしこも人人人人で溢れ、通りを満たしていた熱気や怒声とは比べるべくも無い、正に狂気が支配していた。
『殺せ！殺せ！殺せ！』
『無能な王妃に神の報いを!!』
『神罰を受けるがいい!!』
『この売国奴め!!』
『革命万歳!!』
聞こえてくる怨嗟はドロリとしたタールのように。秩序などありはしなく、市民が口

にするのは、革命への賛美と、今まで自分たちを支配していたものへの憎しみの声。一体これの何処が、人による基本的人権を尊重すべき自由への道なのか。下手な獣の方がまだマシに見えるだろう。いや、そうじゃ無い。皆浮かれているのだ。革命という名の熱に。

彼は無表情のまま静かにその光景を眺めた後、フードに覆い隠された両眼を一度軽く瞑ると、やがてゆっくりと開いた。

ーー刹那、世界は一変する。

色という色が抜け落ちて行き、ある色のみがひかり満たして行く。灰色と青と赤と、そして一際輝かしい光を放つ黄金。それは鷹の目イーグルビジョンと呼ばれる、彼らアサシンのごく少数のみが有する特殊な目だった。

鷹の目が写すは罪なき無辜たる市民の青。己に害をなさんとす邪悪な者たちの赤。そして彼ら闇に潜む暗殺者たる標的を表す山吹色。

ーー流石に一般兵は数が多い。ざっと３０人弱位か。そして、中にはテンプル騎士の息がかかった者達、ね

全てを見透さんとする眼を以って冷静に状況を俯瞰する彼は、その情報を少しづつ整理しながら視線を断頭台へと写す。そこには、二つの金色と、彼にとっては懐かしい王家の象徴たる白百合の花を思わせるオーラを放つ人がいた。

ーー居た

トクン、と刻む心臓の鼓動が微かに跳ねた。久方ぶりに目にするその姿は、遠目であっても気高く、この世のどんな物よりも美しく、尊かった。しかし、彼の鋭きその眼は、同時にそんな存在が何処か疲れ切ったような、弱っているかのような気色を感じ取っていた。

ーーよし

淀みなく、全身に力を巡らす。長年彼女を守護する騎士として、そして邪悪の化身たるテンプル騎士を倒すアサシンとして鍛え上げた鋼の如き身体は、全くの衰えすら匂わせず、その時を今か今かと待っている。その全身を巡る古き教団の血が、かの者達を抹殺しろと疼いている。

そうして彼は再び駆け出す。

高さ十五メートルはあろうかという建物の間と間。幅にして五メートルあるか無いかのその隙間を、彼は八双飛びの要領で足場に飛び移りながら伝い降り、威力を減衰させながら地面へと着地する。そのまま彼は広場を満たす民衆の群れを押しのけながら、一直線にギロチンへと向かっていった。

＊＊＊

「御免なさいね……　靴……　汚してしまったら」

それが王妃が私に向けた言葉だった。なんて事はない。処刑執行される為に断頭台へと立たされた王妃が、ついうっかりと私の足を踏んでしまった。その時、王妃はその端正で美しい顔を物憂鬱げに曇らせ、一介の処刑執行人たる私に向けて謝罪したのだ。その時胸に宿った感情は、一体何だったのだろう。その姿は嘗ての頃とは比べるべくもなく、愛していた市民からは口にするのも憚れるほどの罵詈雑言を浴びせられながらもなお、王妃の気高さと輝きは失われること無く、この沈んだ空模様を打ち消しすらしていた。

これが、王妃なのか。王権の象徴として、弱者を虐げ、悠々と贅沢な暮らしを続けたとされ憎まれる者の本当の姿なのか。

私がいいもしれない謎の感情に翻弄されているその時だった。傍に立つ死刑監督役の将校が、何かを発見して檄を飛ばしたのは。

＊＊＊

「そこのフード男、止まれ!!」

断頭台へと突き進んで行く彼のとこを見守る市民を監視するスイス衛兵が咎める。が、衛兵が威嚇のためのサーベルを腰から引き抜いたその時、走る彼の腕がその首へと迸り、刹那の内に絶命させる。

「己え!!」

「不届きものめ!!」

それに気づいた仲間達が同じように駆け寄ってくる。そして、その先頭にいたガタイのいい衛兵がサーベルを袈裟懸けに振り下ろす。その太刀を、彼は先程殺した兵の遺体でやり過ごし、そのまま死体を盾に体を半歩横へズラしてその衛兵の喉元を掻き切る。更に新たな死体をその後ろから迫る槍持ちの衛兵へと押し付け、衝突するようにして止まった槍持ち衛兵の今度は胸元へ、その左腕を突き立てた。

「が……」

僅かに押し出される息が溢れ、その瞳から生者の輝きが急速に失われる。その様を彼は何の感慨も無しに見つめながら胸に押し付けた左腕を引き抜くと、殺人という恐怖におののいてまるでモーゼの大海のように開いて行く道をゆったりと歩き始めた。くるりと拳をひねりアサシンブレードと呼ばれる彼らを象徴する暗器の機構を作動させて血に濡れる刃をしまう。

「アサシンだ!!捕まえろ!!」

その様を見た将校が声を荒げる。その様を見ながら彼は腰にあつらえてあるベルトからカタナを右手で引き抜くと、それをクルクルと回しながら刃を振り払った。

乱入者たる彼を討たんと迫り来る三人のスイス衛兵。その内の一人が、荒声を上げながら刃を振り下ろす。右斜め上から袈裟懸けにおちる軌道を描くその刃。しかし彼に

とって、その太刀筋はあまりにも温く、そして致命的な迄に煩い。上半身を微かにひねり、迫り来る刃に握るカタナを合わせてサーベルを弾き落し、紙一重で回避した彼はそのままカタナを握る右肘で相手の顎を穿つ。そのままその横から突きを放たんと体を絞るもう二人目の衛兵の首を神速の突きで串刺し、更に奥から切り込まんと飛び込んでくる三人目の衛兵をやり過ごしてその体を両手で支点にしクルリと身を投げ出して半回転。入れ替わるようにし背後を取りその慣性で返したカタナの恐ろしく鋭利な刃で掻き斬り、ついでとばかりに一人目が照準を定めんと向ける銃をその一連の動作の流れで蹴り飛ばした。

「ま、待ってくれ。降参だ。い、命だけは」

瞬く間に五人の同僚を殺され、されに己の武装を完全無力化されたその衛兵は、両腕を伸ばしながらすっかり青褪めた表情で許しを請う。その姿を横目に彼はカタナを仕舞うと、クルリと身を翻して再び断頭台へと駆け出した。

それはまるで、完成された芸術の如き、全くの無駄を削ぎ落とした戦闘だった。相手の攻撃をいなし、僅かな体運びのみでスキを作り出し、致命の一撃を繰り出す。最早この男を止めることの出来る者は、この場に誰一人としていなかった。

「ちぃい。使えん無能どもめ!サンソン!奴の首を落とせ!!」

将校がヒステリックに喚き散らし、サンソンと呼ばれた白髪の男が剣を抜く。一連の

動作から、その男もまた、相当な実力者であることが伺える。しかし、そんなサンソンの存在は彼の眼中にありはしなかった。

断頭台の階段をはね飛ぶように駆け上がりながら、彼は先程仕舞ったアサシンブレードを出現させ、その切っ先を迫る彼へと向けた。

ガキンッ

更に組み込まれた機構が作動し、ブレードを固定していた台から小型の弓が展開される。

パシュンッ

そして、彼が腕を微かに外側にひねりこむことでトリガーが作動し、極微かな反動と作動音を以ってアサシンブレードが飛翔した。ファントムブレード。古くから伝承するアサシンブレードに近代改修を加え新たな機能を追加させた、アサシンの切り札中の切り札。

「なっ!!」

その光景に眼を見開きながら、サンソンは慌てて飛翔し迫るブレードを受け止めようと太刀をもってくるも不意を突かれたソレでは遅すぎる。ブレードは鋭い風切り音とともにとすんと彼の左胸へと突き刺さった。

「ぐっ!!」

鋭く走る痛み。だがそれだけ。致命傷となるには浅すぎる。まだ戦闘は可能、医者の心得あるサンソンはそう判断して体制を立て直そうとしーー

ファントムブレードに仕込まれた毒が、彼の体の自由を奪った。

ーー麻痺毒!!

恨めしげにブレードを引き抜くも、彼は既に動けなくなり、力なく階段から転げ落ちていった。

「こ、このアサシンめ!!」

一人残された将校が、慌てふためきながら剣を引き抜かんと手を伸ばす。が、その時にはもう、その命は晩鐘の音色に魅入られていたのだ。

跳ね上がるように階段を駆け、両足で地面を蹴り穿って大きく飛び上がった彼は、そのままなだれ込むように将校へと飛びかかり、残った右手にあるアサシンブレードを高らかに首元へ深く突き刺した。

「ご……ぐ……」

「眠れ、安らかに」

ポツリと、彼が呟く。その声色は穏やかで優しく、そして何よりも、慈悲に満ちた者だった。両眼を閉じられ、ただ首元からだらりと血を流す、かつて将校だったものの胸元には、十字架をあしらったテンプルクロスが光っていた。

「レ……オ……？」

声が聞こえる。もう聴き慣れてしまった、気高く透き通る彼女の声が。ゆっくりとブレードを引き抜きながらゆるりと立ち上がった彼ーーレオポルド・ル・シブレは眼深に被った鷹のフードを払いながら穏やかに笑った。

「はい。貴方の騎士、レオポルド・ル・シブレはここに」

「どう……して……？」

「どうして？忘れてしまったんですか我が王妃。〝君は、俺が必ず護る〟って」

「!!」

「動かないで下さいね。今拘束を解きますから」

整った顔を驚愕に染める囚われの王妃ーーマリーアントワネットの立ち尽くす場所へゆっくりと歩み寄り、レオはカタナを引き抜くと、何のためらいもなくその刃を王妃へ向かって振り下ろす。しゃんと一分の狂いなく、その刃は彼女を拘束していたロープだけを断ち切った。

「レオ、貴方は一体……」

「マリー。実は一つ、君に謝らないといけない事があるんだ。それはねーー」

『警備を固めろ!!!』

『アサシンを一歩も逃すな!!!』

『サンソン様の手当てを!!』
ポツリポツリと、雨が降りだす。
怒声とともに断頭台の周りを取り囲む衛兵達。それらからレオはマリーを庇うように庇護しながら、抜き放つままのカタナを向け、後ろに立つマリーへあの頃の少年じみた無邪気な笑顔を向けた。

「俺は、アサシンなんだ」

＊＊＊

「――パイ、先輩」
聞きなれたその声で、眠っていた意識が覚醒する。どうやら深く眠り込んでいたようだ。ユラユラと優しい手つきで体をゆすられながら、俺――藤丸立香はゆっくりと目を開けた。
「おはよう、マシュ」
「はい。おはようございます、先輩」
「あらリツカ、起きたのね？」
にこりと朗らかに笑うマシュの声に、いつもは聞かないハズの、珍しい声を聴いた。

「あれ？マリー？」
「ええ。おはようリツカ。調子はよくて？」
「ああ、うん。おかげさまで」
特徴的な大きな赤い帽子をかぶり、すらりと華奢ながら無駄のない体を少しタイトな赤いドレスに身を包み、良かったわと花が咲いたように笑う彼女の名前は、マリーアントワネット。かの有名なフランス最期の王妃だ。
「どうして――」
「偶々気が向いたの。なんだか、リツカに会わないといけない気がして――あら？どうしたのかしら？貴方、泣いているわよ？」
「えっ」
言われて、頬を手で拭った。
何故だろうか。何も悲しくなんてないはずなのに、そんな彼女の笑顔を見ていると、涙があふれだしてきた。

Fate／ :That how story begins

生きるとは呼吸することでは無い。行動することだ。

ジャン＝ジャック・ルソー

＊＊＊

「本日もシュミレーション訓練、並びに各サーヴァント用の種火と素材集めお疲れ様です。センパイ」

「フォウ」

長い長い、今はもう見慣れてしまった鈍色の廊下を歩いていると、ふと、背後から声を掛けられた。まるで鈴が鳴ったかの様に透き通っていて、心休まるかの様にじんわりと満たされる音色。

そしてそこそこの時を共有している筈なのに、未だにその生き物が生態系の何処に属しているかわからない――見た目でいうとどちらかといえば犬に近いようなーー動物の鳴き声。

そんな二つの音が、一人靴底を鳴らしながら歩いていた自分を呼び止める。

ーー今日も元気そうで何よりだ

そんな、当たり前の様でこの世に存在する何よりも幸福な想いを胸に、オレはそんな二つの声へと振り返った。

「マシュに、フォウくんも。おつかーー」

言い切るよりも早く、視界に白と淡い藍色のグラデーションが綺麗な絹の様な毛並みをもつ物体が自分の顔面へと飛び掛かってくる。

「わわ」

「フォウフォーウ!」

「フォ、フォウさん!?いきなり飛び掛かってはセンパイがびっくりしちゃいます!」

「はは、フォウくんはいつもふわふわだなぁ」

モッフモフ、モフフン。まるで、採れたての羊の毛皮へとダイブしたかの様な、ーー実際そんなことした事はない訳なんだけど。今度、あの放蕩な王様にでも聞いてみようかーーなんとも名状しがたい至高の感触が、自分の顔を包み込む。時々足の爪がチクリチクンと自分の肌を刺激するのはご愛嬌。オレは飛び込んできたフォウくんの感触を存分に愉しんだあと、その感触を惜しみつつもフォウくんを肩へと置き、自分よりも遥かにちっちゃい、けれどその在り方は自分の知る何よりも堅牢な六花の後輩へと向き直った。

「マシュもお疲れ様。今日はもう終わり？」
「はい、本日の業務はこれで終わりです」
「そっか。ドクターとの定期検診の結果はどうだった？」
「特には何も。『よしと！数値に異常はなし。文句なしの健康体だね。だからと言って、無茶は禁物だからね』と仰ってました」
　それは彼女なりのドクターのマネなのだろうか。鈴の音色を低く、少しだけ頼りなさげに、首筋を揉む様に手を添えながら話すその様子が、申し訳ないんだけど微妙に模倣しきれてなくてーーでもそれがとても微笑ましくて、不覚にもクスリとしてしまった。
「ーー似てませんでしたか？」
「ああゴメンね。でも正直に告白させてもらうとーーチョットだけね」
「フォーウ」
「なるほど……　改善の余地アリという訳ですね」
　参考になります。と口にしながらマシュが手をアゴに添えながらムムムと唸る。柳の様な眉を歪め、しばしの間思考に耽っていたマシュだったが、やがてハッとした様な顔をし、やがて申し訳無さそうに顔を下げた。
「申し訳ありません。本題を忘れて、一人思考に埋没してしまいました」
「いいよいいよ。それで、本題って？」

「はい、宜しかったらこの後のセンパイの予定を伺ってもよろしいでしょうか？」
「予定？」
「はい」
予定、か。言われて、自分が左腕に掻き抱いていた硬質な感触を思い出す。
そうだった。今日もいつも通りレオニダスブートキャンプを終えた後、レイシフトシュミレーターで訓練をした後に、サーヴァント達用の素材集めに勤しんでいて。今日狩りに狩って増加した備蓄分を、ダヴィンチちゃんへ報告しようとバインダーに挟んだ報告書片手に工房へ赴いていたのだった。
「これから、ダヴィンチちゃんの所へ業務報告に行こうと思っててね。今日もサーヴァントの皆んなが沢山集めてきてくれたからさ」
「成る程、そうでしたか」
素材とはとても重要だ。このカルデアの運営は、第一に素材で始まり、第二に種火、三四が素材で五がＱＰだ。昔の人は言いました。〝備えあれば憂いなし〟と。
「でしたら、これからご一緒しても宜しいですか？フォウくんのも私も、丁度手持ち無沙汰になってしまいまして」
「ああ、全然構わないよ。じゃあーー」
一緒に行こうか。

そう言おうとして、不意に意識がブレた。五感が遠く、希薄になって行くのに、何故か思考だけがハッキリと明確にクリアになって行く。まるで、自分の内にある、それこそ本能に近い様な場所がパッと拓いたようとでも言おうか。刹那、まるで閃光の様に瞬くフラッシュバックが、己の脳裏を駆け巡った。

ーー良いか息子よ、お前はアサシンなんだ。それを、ゆめゆめ忘れるな

これは記憶だ

ーー我ら闇に潜む者。されど、光に奉仕せん。

自分じゃない誰かの、かつての記憶

ーー候補者よ、こちらへ

――ほう、シャルル・ドリアンの子息が帰ったとはな。ベレックは来ないと言っていたが･･･ 何故来た？

ーーもう過ちから逃げたくない。デ・ラ・セールさん。父を･･･ 全てを正したい

ーーよろしい。闇を抜けて光の中へ。そして、光から闇へ戻る。タカの道を通る覚悟は？

――「助けがいるか」って意味ならば、答えはイエスだ

ーー小僧（Pispod）は強くなる。お前も、アイツのバディになってもらおう。

歴史に記されず、人々にも記憶されない。その存在が、表に出ることは決してない。

そうやって、はるか太古の時から人類を、いや、人理を邪悪な敵意から護ってきたある教団の。

ーーレオ!こっちよ!!

ーーキミはいけ好かない奴だけど、信用には足る存在だ。おやおや、意外な顔をしてくれるな。当然だろう?キミは僕とマリーの親友なんだから

汝の剣を罪なき者に振るうな

Ｓｔａｙ　ｙｏｕｒ　ｂｌａｄｅ，ｆｒｏｍ　ｔｈｅ　ｆｌａｓｈ　ｏｆ　ｉｎｎｏｃｅｎｔ

ありふれた風景に溶け込め

Ｈｙｄｅ　ｉｎ　ｐｌａｉｎ　ｓｉｇｈｔ

教団の名誉を汚すことなかれ

Ｎｅｖｅｒ　ｃｏｍｐｒｏｍｉｓｅ　ｔｈｅ　ｂｒｏｔｈｅｒｈｏｏｄ

真実などなく、許されぬ事もない。

刻まれる教義。そして核を為す信条に従うがまま人類の為に暗躍し、それでいて、一人の女性を生涯護り続けたーー

レオポルド・ル・シブレのーー

「センパイ!?センパイ!!しっかりしてください」

「フォフォウ、フォー!!」
そこで、俺の意識は緩やかに吸い込まれるようにして内へと埋没していったーー
＊＊＊
「俺は、アサシンなんだ」
雨が降りしきり、体温を緩やかに奪って行く。鍋をひっくり返したかのような喧騒が息巻くその中で、彼はついぞ己が真の姿を告解した。
「アサ……　シン……」
まるで幽霊にでも遭遇したかのような驚愕を浮かべ、告げれれた女性はその宝石のような双眸を見開いていた。
無理もない、と彼は思う。彼女の中で、己は既に死んだはずの存在として認識されている。
華やかなフランス王室の至高、マリー・アントワネット王妃と夫でありこの偉大な国を統べるルイ16世。そして彼女達の愛しい子息達が安全の為、避難する為に彼は護衛将校として彼女達の護衛任務に就き、計画が無慈悲に瓦解してゆく中一人単身で革命勢力と闘い、壮絶な最期を遂げたと。
今はもうすっかりと窶れ、その瞳に絶望すら宿しているように感じる王妃を見て、レオは激しい後悔の念に苛まれていた。

ーー自分はアサシンだ。信条に従って動いただけ。それに後悔はない。けれど結果、それが彼女の幸せをーー大切な全てを踏みにじって粉々に砕いたのも当然だ

覚悟はしていた。予想なんて、安易についた。これは、〝人類の為〟という大層なお題目を盾にした反逆罪だと。だけど、今目の前にいる、すっかり変わり果ててしまった彼女を見ると、果たして自分が、如何なる所業を招いたかが如実に実感する。

「貴様ッ!!大人しくしろ!!」

「抵抗など考えるな!!」

思考が、地を割るような怒号によって現実へと引き戻される。スイス衛兵が、少なくとも七人。レオとマリーの立つ処刑台へと続く上り階段をまるでバリケードでも敷いているように立ち塞がっていた。明らかに、状況は絶望的だ。しかし、フードを払ったレオは、片手で呆然と立つままの彼女を庇うように守護しながら、その口元を不敵に歪めた。

ーー始めるか

再び、四肢に力を込める。そうして、彼は左手を腰にある革製のポーチへと素早く滑り込ますと、手に取ったそれを立ちふさがる彼らへと投げ放ち、更に自分の足元へと叩きつけた。

「「!!!!!!!!!!」」

刹那、鋭い破裂音が大気を走り、突如として濃密な煙幕が、その全てを包み込む。視界の全てが、瞬きの内に白色へと染まり上がる。そこへ、レオはまるで踊るかのようにして斬り込んでいく。

全てがホワイトアウトしてしまったその世界。本来なら、こんな状況で戦闘など出来るべくもない。唯の一般兵卒たるスイス兵もそれは同じ。だがレオは違う。その躰に流るるは、古きより脈々と続く鷹の暗殺者の、ーーひいては〝かつて来りし者〟と呼ばれた神がごとき存在の傀儡でしか無かった〝ヒト〟という種を解放に導いた者の血なれば。

ーー世界が、豹変する。

色が欠落したその世界。〝鷹の眼〟によって暴かれたその世界は、依然煙に巻かれる兵士の全てを見通していた。

ふわりと斬り込んだレオは、只々狼狽えるだけの兵士を、手にする得手たるカタナとピストル、そしてアサシンブレードでまるで機械のように無駄なく処理していく。無慈悲かつ致命的、かつ正確な脚さばきと体使いで、やがて白煙が晴れると共に、レオは七人の衛兵を、迅速に屠殺してのけていた。

「……　すごい、わ」

それを、未だ状況が飲み込めず、半ば停止したままの思考で後ろより見届けていたマ

リー夫人は、思わずそんな声を漏らした。

レオとの長い付き合いの中で、当然マリーは彼の戦う姿を何度も見届けてきた。幼少期は父と母の有する軍隊に混じって訓練し、それを庭園から眺めていた。青年期になると、彼女と共に社交界へ赴くことが激増した中で、諸侯との親交を深める名目で、多くの武闘会が催され、そこでフェンシングの腕を披露してきた。そして彼女が夫となるルイ16世へと嫁いだ時も、宮廷の中で随一と名高い流麗のシュヴァリエ、シャルル・ジュヌヴィエーヴ・ルイ・オーギュスト・アンドレ・ティモレ・デオン・ド・ボーモンと御前試合を行い、その対決は真に世紀の対決と名高かった。

だが今目にしてるそれは、あまり剣術ひいては武術に対しての知恵がないマリーをして理解できる程に乖離していた。

彼女が知っている彼の武術をうねるが如き激流とするならば、今目の前で行われているそれは静かなる清流。

見た目には成る程静かで、美しさすら感じさせるだろう。しかしそれは飾り。それ騙されたモノをおぞましい冷たさと、底にて渦巻く対流が忽ち引き摺り込んでしまう。

その、余りにも洗練されているが故にゾッと背筋が凍る程に恐ろしい戦闘術に、気づけばマリーは今自分が置かれている状況も忘れて見惚れていた。

あまりの凄まじさに、残るスイス兵は尻込みするまま彼に近づこうともしなかった。

それを確認したのち、レオは素早く身を翻すと、嘗てとは違い、素朴で粗末な服を纏うだけの王妃へと駆け寄る。
「マリー、遅くなってゴメンよ」
「本当に、レオなの？可笑しいわ。私、死神にでも魅入られてしまったのかしら」
「幽霊でも無いし、ましてや死神でも無いさ。……　少し失礼」
　言うよりも早く、レオはその小さな王妃の体を己へと引き寄せると、そのままくるりと体を反転。腰に誂えた皮ベルトへと帯刀していたカタナをい走らせ、コンマ数秒遅れて王妃へと向けられた凶弾を斬り伏せる。
　意図せずして彼の胸元へと頭を埋める事になったマリーだが、伝わるゴツゴツとした胸板の感触、そして人の有する温もりと、トクントクンと確かに、されど力強く拍動する鼓動が、彼が幻などでは無い本物であるのだと実感させ、また同時に彼女の困惑するままの思考をじんわりと解し、どこか懐かしいその感触が、彼女へ安息を与えた。
「本当に……　レオなのね」
「そうさ。色々話したいことはあるし、キミにも色々と問い詰めたいことがあるんだと思う。けれど今は時間がない。今は、俺に全てをゆだねてくれないか？」
　曇り一つない天色の、それでいて鷹を想起させるかの様な鋭い双眸が、真っ直ぐにマリーを見つめている。容姿も、放つ雰囲気も、全てが昔とは大きく変わっていった。

けれど、その瞳、その奥に瞬く優しげな決意の光は今も不変のまま。自分達がオーストリアに居たころのままだった。それが、なんだか少し嬉しくてーー状況は涙さえ出て来そうになるほどに不利なのに、きっと彼ならどうにかしてくれるだろうという確信を、彼女に抱かせた。

「分かりました。どうかその剣で、私を護ってくださいな」

ーーならば、今も昔も変わらぬこの忠節の騎士の主人として、自分は信じて何時もの様に手を差し伸べるだけだ

「――仰せのままに。我が白百合の姫君」

その返答に、彼は屹然とした姿勢のまま一礼し、嘗ての様に、己へと差し出された手を優しく取り、ふわりとした笑みを浮かべるまま、パサリと払っていたフードを被せた。

＊＊＊

さも轟音が如き銃声が、曇天の空を突き抜ける。

「はっ!!」

短く息を吐き出し、体を鋭く踏み込んで半弧を描く様に迫る刃へ、すくい上げる様にして振るったカタナを合わせ、そのまま打ち上げる。そのまま、レオはカチ上げたカタナをくるりと回し逆手に持ち替えると、抉じ開けた相手の首筋へ、迷う事なく刃を突き立てる。

「カヒュ」

突き立てられた刃が気管支、肺、そして頚動脈を潰し、速やかに相手の体から生命を奪って行く。

「マリー!!こっちだ!!」

引き抜いた刃を振り払って血を拭い、空となった銃身へ弾を装填しながら、自らが切り開いた道へ王妃を誘導する。

新時代の到来を告げる音色たる革命広場は今や混沌の極みと化していた。突然の闖入者による強襲に民衆はパニックを起こし、我先にと安全な場所へ逃げようとするその動きがまるで濁流が如きうねりとなっていた。こうなっては、レオを捕らえんとするスイス衛兵も、その流れに翻弄され中々近づけないでいた。

いつの時代になろうとも、社会の大多数、構成は〝民衆〟に他ならない。そして本質的に、大きな力を持つのもまた、〝民衆〟なのだ。何もレオは無謀にも単身乗り込んだのではない。〝アサシン〟として、罪無き民を味方に、教団の命の元実行しているのだ。

「よし着いた!マリー!!馬に乗ってくれ!!」

その流れに逆らう事なく、己へと迫ったスイス兵を処理しながらレオが目指したのは、王妃がここ処刑場へと移送する為に用意された馬車。

「馬の方へ?」

「そう！俺の肩を使うんだ！」
　言いながら素早く馬の側面へと屈み込んだレオは、慣れた身のこなしで己を踏み台に王妃を乗馬させると、続いて自らもヒラリと飛び乗り、右手で手綱を握ると、左に持つ連装銃のトリガーを引き、馬と車とを繋ぐヒンジを破壊。
「そら駆けろ!!」
　その音で暴れる馬を手懐けながら、腹部を蹴ってギャロップさせた。
　うねる民衆の群れを避けながら、荒々しく駆ける馬は、忽ち広場を脱しシャンデリンゼ通りを下って行く。レオは、発動させた鷹の目で周囲の状況を俯瞰する様に観察しながら、残った煙幕弾を通る後方へと投げ放ち、追っ手を完全に撒いた。
「これから何処に行くのかしら？」
「一先ずは俺が用意したセーフハウスへ。その後はーー」
「懐かしいわね」
「え？」
「なんだか懐かしいわ。こんな状況だけれど、昔オーストリアに居た日々を思い出すの。初めての乗馬訓練の時、貴方がこうやって手本を見せてくれたじゃない？」
「……　そうだね。本当に」
　背中に感じる、余りにも軽い感触。とんと背中に預けられた頭と共に腰へと添えられ

た腕が強く締め付ける。彼女は今、何に思いを馳せて居るのだろうか。名誉も、尊厳も、地位も、幸福も、愛したモノも、愛していた人達も、全てを踏み躙られ、酷いままに嘗て彼女が愛していた人達に簒奪された。嘗ての白百合の王妃は、その胸に何を抱き、何を想いながら、自分へと全てを背負うには余りにも小さい躰を預けているのか。それを知る権利など、己が信条の為に逆賊と堕ちた自分に有りはしない。

＊＊＊

『ねぇ、レオ』

『はい、なんでしょう?』

『もぉ、治らないわね。敬語じゃなくて良いって、何時も言ってるでしょう?』

『ああごめん。どうしてもクセがさ』

――夢を見ている

『まぁいいわ。ねぇ、レオはどうして剣を学ぶの?』

『だって、僕はマリーを守る騎士だからね。剣くらい鍛えないと、キミを守れないだろ?』

――今はもう昔。まだ私に、何も背負うことがなく、世の中に満ちる様々な事の意味を多く知らず、唯流れる日々という平穏を享受し、微睡んでいた頃の。

『それは、お母様やアナタの父上がそう望むから?』

『そうだね。……　うん。確かにテレジア様や父上がそう望むからっていうのもあるよ。けれど、他にも、理由はある』
『どんな？』
『僕はこの剣でキミを護る。それと同時に、僕は皆んなが笑って、なんの不自由なく、明日に希望を持てることができるような……　そんな平穏な世界を見てみたいんだ」
ーーまっすぐな目で、どこか遠くを見つめながらそう口にしていた少年は、誇り高く、随分と大きく、大人びて見えた。それが私にとって、なんだか彼が遠くに行ってしまうように思えてーー思わず無意識の内に、彼の左手を握っていたのだ。
『素晴らしい世界だわ。私には、想像もつかない程の』
『けどそれには僕自身が強くなくちゃ。力が無いと、何も出来ないから』
『ねえ、レオ。もし良かったら、私もその世界を見てもいいかしら？ーー皆んなが笑って、楽しくて、何の不自由なく暮らせる世界ーーやっぱり、想像もつかないのだけれど、それはきっとステキな世の中だと思うの』
『うん。良いよ。いつかーー約束は出来ないけれど、いつかきっと、僕がそんな世界にマリーを案内してあげるからーー』
ーー優しく、手を握り返される。
ーーいつかきっと。そう約束した少年の、小さいけれど自分より大きい優しくて少し

ゴツゴツとして手。その薬指には、厳しい訓練の結果なのだろうかーー昔から、何時も包帯が巻かれていた。

まるで、ナニカを隠すように

＊＊＊

「んーー」

滞留していた意識が、後押しされる様にふわっと浮かび上がってくる。ゆっくりと瞳を開けると、最初に飛び込んできたのは濡羽色のローブに覆われた広い背中ではなく、年を経て色が微かに抜け落ちた、木張りの天井だった。

「起きたみたいだね」

「レオ?」

不意に声を掛けられて、彼女はゆっくりとその体を起こす。石と木で作られた室内。内装はとても質素で、あるのはテーブルと椅子。暖炉に彼女が今横たわってるベットだけ。暖炉には火が灯り、ゆらゆらとした暖かい焔をあげながら、くべられた薪を燃やしている。レオは、その暖炉の前で一人、椅子に腰掛けながら揺れる火を見つめていた。

「おはよう……　っていうには、ちょっと遅いんだけど。どうかな?体の具合とかは大丈夫?」

「ええ、特には何も無いわ。ここは?」

「ここは俺が用意したセーフハウスの一つ。より正確に言うなら、スイス支部が用意してくれた場所、だけど」
「スイス支部？」
「そう。俺が所属する、〝アサシン教団〟のね」
〝アサシン〟
その単語が、マリーの中をぐるり巡る。暗殺者、つまりは何らかの手段を以って、政治的及び社会的な要人を殺害することを生業とする者達のこと。当然、マリーだってその存在は知っている。彼女は〝王妃〟ないし〝貴族〟だ。その所属カテゴリーは当然〝狙われる者〟になる。
華やかなヴェルサイユの、あの名誉と栄光、そして尊厳に満ちたあの場所は、その実悍しいほどの邪悪に満ち溢れていた。権謀術数は言うに及ばず、妬み嫉み、憎悪や敵意悪意などなど、数えればキリがない。当然、その頂点たる夫にしてあの〝フランス〟の王であったルイ１６世の妻として世間に君臨した〝マリー・アントワネット〟も例外ではない。
事実として無実であったが、結果的にその嫌疑が今の動乱の引き金となった〝首飾り事件〟は彼女の記憶に新しい。あれも最終的に〝ラ・モット伯爵とその加担者〟が手口こそ豊富であれ何者かに暗殺された。

自分はそういった行為を行う者達である、と彼は言っているのだ。そこで、彼女はハッと自分が座るベットの斜め正面に位置する慎ましい暖炉の前で静かに佇む彼を見た。

「……アナタなのね？ラ・モット伯爵達を殺したのは」

「……」

「答えなさい。騎士〝レオポルド・ル・シブレ〟」

「ご明察です。確かに私がこの手で殺しました」

「……そう」

思わず、天を仰ぎ見る。揺れたその体によって、素朴なベッドがぎしりと軋んだ。

まだ彼女が小さかった頃、まだ花と愛する両親、親愛なる従者達、そして無邪気な夢しか知らなかったその頃から、レオポルド・ル・シブレというヒトはマリア・アントーニア・ヨーゼファ・ヨハンナ・フォン・ハプスブルグ＝ロートリンゲンの側にいた。単純な数値にしても、もう彼女にはわからない程に、彼という存在は常にその隣にあった。

それは〝恋〟だとかそんな甘酸っぱいものなのではなく、大人達の幾ばくかの打算と、何よりも当人達の強い博愛の元に。

けれど自分は、そんなにも永くの時を共にした人の事を、何一つ知らなかったのだと実感させられた。

暗殺者(アサシン)だ、と告白するレオの姿に、マリーは動揺もしないし、怯えもしなければ、軽蔑なぞ抱きはしなかった。唯一つ、彼女の中に芽生え、感情という花を咲かせているのは〝何故〟という、極めて単純で明快なものだった。

暗殺者であるならそれで良い。道徳的には蔑まれるべき存在であるとしても、彼は自分の〝騎士〟としてその旅路を共にし、常に護り続けていたと言う事実は変わらないのだから。けれど彼が言う〝アサシン〟とは、自分が知っている〝暗殺者〟及びそれに付随する概念とは大きく違うのではないか。そんな、漠然とした、けれど半ば確信めいた考えがまた、彼女にはあった。

ならば、残ってる事柄など彼女にとって一つしかなく、故にそれを手に取るのは自然と息をするように簡単な事。知らないのならば、知ればいい。

〝無知は罪なり、知は空虚なり、英知持つもの英雄なり〟

成る程それはそうだ。未だ多くは理解できないけれど、まずは〝知ること〟から始めようではないか。

そうした決意を胸に、マリー・アントワネットは屹然と、爛々と煌めくようにゆらめくクリスタルパールの瞳を向けながら、かつて王宮にいた頃の、ともすればそれ以上の、〝意思〟という白百合の輝きを放ちながらその想いを言の葉と編んだ。

「ねぇレオ。よかったらアナタのこと、私に教えてくれないかしら?私が知らない、アナ

タの〝本当の〟事を」

ーー『アナタ、お名前はなんというのかしら?』

『レオポルド・ル・シブレ。気軽にレオとお呼びください』

『まぁ、レオと言うのね。なんて素敵な名前でしょう!ええ、ええ!確かに獅子のような人だわ!!』

その輝きは彼にとって、本当に懐かしい、脳裏の奥深くへと焼き付いた、あの時のようでーー

「うん。勿論、そうするつもりだよ」

アサシン教団としてもなく、ましてや彼女お付きの騎士としてもなく、〝レオポルド・ル・シブレ〟という個人として、その問いに、静かに頷いた。